

櫻井知愛

波間の戯言
たわごと

人 物

荒垣 松太郎（72） 無職

荒垣 竹海（38） 松太郎の息子

荒垣 夕海（35） 松太郎の娘

鈴木 宗二（68） 公園管理員

少年（7）

警察官の男

○海釣り公園・前

海に面した公園。「海釣り公園」の看板。

○同・栈橋

栈橋に置いた青いクーラーボックスに腰掛け、釣竿を握っている荒垣松太郎（72）。竿先から海へ真っ直ぐ糸が伸びている。隣に短い釣竿をかついだ少年（7）がやって来て声をかける。

少年「おじさん、何釣ってるの」

面倒くさそうに答える荒垣。

荒垣「ああ？ 鯨だよ」

少年「鯨あ？ そんなの釣れるわけないじゃん」

荒垣「チッ。うるせえガキだな。あっち行け！

シッシッ」

片手を払う荒垣。少年が膨れっ面をして去って行く。

舌打ちをして、体勢を整える荒垣。

荒垣の背後に現れる作業着姿の鈴木宗二（68）。「海釣り公園」と書かれた

腕章をつけている。

鈴木「松さん、調子はどうよ」

荒垣「こんな所で釣れやしねえよ」

微笑みを崩さない鈴木。

鈴木「松さん、前にも言ったけど……」

荒垣「チッ。今日で終わりってんだろ」

鈴木「長いことありがとな」

荒垣「埋め立てとはな。つたく、お役所の奴らくだらねえ。くたばれてんだ」

荒垣の肩をポンと叩く鈴木。

鈴木「松さん、またな」

去って行く鈴木。無言で釣竿を握っている荒垣。

びくともしない荒垣の竿先。

○荒垣家・玄関・前（夕）

2階建の古めの一軒家。玄関横に「荒垣」の表札。

○同・玄関・中（夕）

玄関のたたきに置かれた青いクーラーボックスと釣り道具。無造作に脱ぎ捨てられた一足の汚れた長靴。

○同・和室（夕）

仏壇の前にあぐらをかいている荒垣。

仏壇には荒垣朝子（65）の遺影。

荒垣「どうしろってんだ……」

鼻をすすする荒垣。

○海釣り公園・前（朝）

入り口の門が閉まり、「閉鎖」の看板が掛かっている。

荒垣が釣り道具を抱え、片足を少し引きずるようにして歩いてくる。

門の前に立ち止まる荒垣。門に手をかけ、ガチャガチャと揺する。

手を止め、一度舌打ちする。

辺りを見回してから、門の上に手を伸ばし、体を持ち上げる新垣。

警察官の男が自転車を止めて荒垣に駆け寄る。

警察官の男「ちよつと！何してるんですか！」

荒垣「何って、用があんだよ」

警察官の男が荒垣の体を抑える。

警察官「閉鎖って書いてあるでしょ！」

抵抗する荒垣。

荒垣「うるせえ！離せ！俺は釣らなきゃならねえんだ！」

荒垣、手が滑り警察官と尻餅をつく。

○交番・中（夕）

頭を下げている荒垣竹海（38）。その横で不機嫌そうに座っている荒垣。

竹海「本当に、ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

正面に座っている警察官の男が苦笑いを浮かべる。

警察官の男「事情があるようでしたけど、何も教えてもらえませんでしたよ」

竹海「すみません……」

警察官の男「お父さん足も悪いみたいだし、
気をつけて見といてやってくださいね」

竹海「はい。ご迷惑をおかけしました」

横を向いたまま口を開かない荒垣。

○荒垣家・玄関・外（夕）

玄関へ入って行く荒垣と竹海。

○同・玄関・中（夕）

玄関のたたきに女性物のパンプスが一
足並んでいる。

廊下の奥から荒垣夕海（32）が早足で
やってくる。

夕海「お父さん！」

荒垣「おう、夕海、来てたのか」

夕海「もう！ちよつと、お兄ちゃん！警察つ
て何？お父さん何したの？」

靴を脱ぎ捨て、早々に引き戸の和室に
入って行く荒垣。

竹海「閉鎖中の公園に不法侵入しようとして
たつて」

夕海「なんでそんなこと！」

竹海「多分……釣りかな」

夕海「釣りって……ねえやっぱり、ちよつと
お父さんおかしいよ。たかが釣りのために
そこまでするなんて」

黙ったまま和室の方へ視線を送る竹海。

○同・和室・中（夕）

仏壇の前にあぐらをかいている荒垣。

朝子の遺影を見つめている。

○同・廊下（夕）

廊下に立っている竹海と夕海。

夕海「確かにお父さんは昔頃から釣りバカだ
ったけど。5年前の……お母さんが亡くな
った時だって……」

竹海「あ、そっか。あの時夕海はお父さんと
入れ違いで病院着いたんだっけ」

夕海「あんな大変な時にわざわざ釣りに行く
必要ある？それにあの後……」

竹海「だからこそ、だったのかな」

夕海「はあ？お母さんがもう死にそうって時
にだよ？しかも海に向かう途中でお父さん
交通事故起こしたんだよ!!」

竹海が苦笑いを浮かべる。

竹海「そうそう、本当にあの日は大変だった
よね」

夕海「笑い事じゃない！」

竹海「ごめんごめん」

和室から荒垣が出てくる。

荒垣「ガチャガチャうるせえなあ」

夕海「お父さん」

荒垣「世話かけたな。飯でも食ってけ」

顔を見合わせる竹海と夕海。

○同・キッチン（夜）

コンロの上に焦げた鍋。鍋の底にラー
メンの麺が数本こびりついている。

○ 同・居間（夜）

音を立ててラーメンを啜る荒垣。

竹海も黙々とラーメンを食べている。

箸が進まない夕海。

夕海「……ねえお父さん」

荒垣「なんだ、うめえぞ」

夕海「今日を機にさ、少し釣り……控えたら？」

口から麺を飛ばしてむせる荒垣。

荒垣「ああ!! 何言ってるんだおめえ！」

箸を持つ手を止める竹海。

夕海「だって……だってお父さんの頭の中、

いつも釣りでいっぱいじゃない！ 今からで

も少し私たちや孫たちのことも……」

バンッと大きな音を立てて箸をテーブル

に叩きつける荒垣。

荒垣「何の文句があるってんだ！ 俺の勝手だ

ろ！」

夕海「お母さんのことまで放ったらかして、

ずっと釣りばかりして、おかしいんじゃない

いのって言うてんの！」

竹海「夕海……」

立ち上がる荒垣。

荒垣「うるせえ！頭がイかれてようが、俺は釣らなきゃなんねえんだ！」

夕海も立ち上がる。

夕海「なんでそこまでムキになるのよ！人様に迷惑かけてまで釣りに行く意味ってなんなのよ！」

荒垣「オメエには関係ねえ！」

竹海がかぶせて大声をあげる。

竹海「父さん！」

荒垣と夕海が黙る。

竹海「ちゃんと話そう」

荒垣が一度舌打ちをして、ドサッと腰を下ろす。

荒垣「……母さんが、最後に言ったんだよ」

荒垣を見つめる夕海。

荒垣「お父さんの釣ったタコが食べたいって」

夕海「た、タコ？」

荒垣「だから急いで海に行こうとしたんだよ。」

したらよ、これやっちゃって」

荒垣が拳で片足を叩く。

荒垣「船にも車にも乗れなくなっちゃった。

でも……」

夕海も静かに腰を下ろす。荒垣が小声

でぼそぼそと呟く。

荒垣「ずっと待たせちゃってんだ……」

夕海「そんな……」

荒垣、小さく丸めた背中を夕海に向ける。

夕海「お父さん……」

竹海が夕海の顔を伺う。

夕海が竹海を睨み返す。

夕海「お兄ちゃん！」

竹海「はい！」

夕海「お父さんの足になってあげて」

竹海「はい!!」

荒垣「はあ!!」

荒垣が怪訝な顔で二人を見る。

櫻井知愛